

が建ち並び、主に食料品店が多かった。そのほか衣類の店も並んでいる。この町はいわゆる官庁街であるとのことであった。監督はふと一軒の店に入った。私達も一緒に入った。そこはキャバレー街だった。私は田舎育ち、日本にいてもキャバレーなんて入ったことはなく、びっくりして中を見回した。中は薄暗い、ドレスを着た若い女の人達が四、五十人いるようだった。

しかし何か落ちつかない。監督の言われるままに椅子に腰を下ろした。注文は監督がしてくれた。女の人達も私達を見て驚いたのではないかと思つた。酒を飲み、何か分からない物を食べた。そして、その勘定は各人で払えとのことだったので払つたが、幾ら払つたか思い出せない。監督の言うのには、このキャバレーは中流以上の人達でなければ入れないと説明してくれた。

冬は非常に寒かつた。零下四五度から六〇度くらいまで下がることもあつた。だが五〇度になると作業はさせなかつた。

またこの寒さを越さなければならぬかと思つたと気が重かつたが、いよいよ私達にも帰る日が来た。それは昭和二十三年十月、そして喜びいっぱい舞鶴の土を踏んだのは十月十四日であつた。

我が思い出の記

千葉県 伊藤 千次

シベリア抑留生活第一歩

ウラジオストクを出港してより十日目、昭和二十一年（一九四六）年一月十七日朝、左舷に雪を被つた山々が見え、氷の大海原に船は止まつていた。船倉までニュースが伝わり、船内は大騒ぎである。十日前までは内地帰還の夢があつたが皆の心配が本当になつた。皆、上甲板に上がつて来た。朝の太陽が氷原をギラギラと照らしてまぶしい。一番に歩哨が氷原に四、五人降りる。次に板切れが落とされて驚いたことには焚き火を始め

た。次には、ジープが降ろされ氷原を走って行ってしまう再び驚いた。

下船命令が下った。三千人降りるには時間がかかる。昼頃までかかったような気がする。とほとほと歩き出す。前を大型船が横切り、海が凍るまで三十分待たされた。これは三つ目の驚きだ。途中で他の部隊は諸方へ別れて行き、夕方近くなると私達二百余人になってしまった。だんだんと街の明かりが見えてくる。シベリア大陸上陸第一歩である。

小さな湾の奥まった川口の南岸に上陸し、高台の部落に上っていった。湾の入り口北岸に大きな町の灯が見える。薄暗くて良く分らないが、集会場のような広い平家に辿り着く。大きな三キロパンが渡され五、六人で切って分ける。黒パンの味も初めて、酸っぱい。ここで板の間の上にごろ寝、寒い寒いシベリアの第一夜を明かす。

チパリ収容所で伐採作業

明くれば一月十八日、快晴である。隣はパン工

場だった。後にここに使役に来ることになる。いよいよ抑留生活の始まりである。私達五十人、前、中、後ろと武装した歩哨が三人付き、どこかへ出発した。高台を下り川口に出る。川は氷が張り詰めている。上流に向かって二列縦隊で進む。革靴なので滑って歩きにくい。一日じゅう歩き続けるもなかなか目的地に着かない。その目的地も、何のために行くかも知られされていない。腹も空いてくる。夕暮れも迫り寒くなってきた。だんだんと暗くなり、何も見えなくなり怖くて歩けない。前の人に綱を引いてもらって歩く。私物を背負い、滑りながらへつぴり腰で歩いた姿は今でも覚えている。

後で分かったことだが鳥目になっていた。三合里以来食事に缶詰が多く、生肉、魚、野菜が少なくビタミンAが不足して夜、目が見えなくなっていた。夜遅くチパリ収容所に着いた。入り口の電灯に照らし出された高い板塀、その外にもつと高い鉄条網、四隅の望楼には照明灯が光り武装した

歩哨の目も光っていた。

暗くてよく分らないが細長い小屋の中央に薪ストーブがあり、両脇に丸太の床の二段ベッドがあった。そこに着たまま寝た。翌日いろいろのことが分かった。チパリ収容所は川上に向かつて左側に切り立った山があり、その隣に幅四十五メートルの川があり、その隣には百メートルほど平坦地があつて次が高い山になっている。収容所は川なりに、横百メートル、縦五十メートルに鉄条網を張り、右の方に入り口、衛兵所、炊事場と風呂場。左の方に三間に五間の小屋が二棟、道なりに建ててあり、川の下角に便所があつた。

いずれも小屋は丸太を横に積んだカナダ方式。室内に電気はなく、白樺の皮を缶詰の空き缶で燃やし明かりとした。白樺の皮はジイジイと音を立ててよく燃えるが煤煙がすごく、皆朝になると顔が真っ黒になつていた。

仕事は伐採作業。冬は日が短いので朝暗いうちから起こされ、夕方暗くなつて帰つて来る。寝て

いる以外は歩いているか作業をしていた。楽しみは日曜日のお休み。水がないので風呂場があつても入れず、洗濯もできず。虱と同居して寝るだけだった。

レールを一メートルほどに切り、穴を開けてつるし、朝五時になるとカーンカーンと起床の合図である。食事当番は炊事場へ、他の者は内外の片づけと自分の支度。私は昨晚暗くなつて帰り、戦友に助けられて丸太の寝台に着き、靴、巻脚絆、飯盒を枕元に置き寝た。夜中に大小便の用ができると大変である。手探りで靴を履き、何本目かの柱からドアを開けて外に出、その場で用を足し、また柱を伝わつて戻つて寝る。朝かちかちに凍りついている大便を戦友が始末してくれる。ありがたいと合掌する。朝は手探りで靴を履き、巻脚絆を巻き、飯盒を前に朝食を待つ。これが本当の鳥目の人の姿。

いつの時代にもずるく、横着者はある。食事当番をサボるために鳥目になつたは良いが、パンを

分配してもらい、私達は本当に見えないのでありがとうと戴くが、目の見える人は大きい小さいと苦情を言い、仮病がばれて大目玉。私達はいい災難、肩身の狭い思いをした。

薄暗い中午前六時衛門集合、前の人の肩につかまって歩く。二週間前まで内地帰還、家族再会を夢見ていた私達、歩きものろのろ。歩哨の言葉「ダワイダワイ（急げ急げ）」、「ビストラビストラ（早く早く）」最後は我々が歩かないので「ヨッポイポハマーチ（畜生）」を連発する。作業場に着く頃は夜が明ける。

まずマッチがないので昨日の焚き火の残りを確認する。火種があれば枯れ枝を集めて燃やして火を大きくする。火種が消えていれば近くの組からスコップで火種を貰ってくる。

伐採作業は五人一組で、二人引きのピラー（鋸）とタポール（鉈）で二抱えもある樅や落葉松の大木を切り倒し、六メートルに玉切りし一カ所に積み上げて、枝葉は全部燃やして山をきれい

にする。

まず雪が積もっているので木の根本をなるべく深く掘り下げて、倒す方向を決めて受けを切り、タポールで斜めに逃げを切り落とし、反対側から角度をつけて切り始める。倒れる前に隣のグループに声を掛け合い安全を確認し切り倒す。

直径一メートル、長さ三、四十メートルの大木がドウーと雪煙を上げて倒れる様子は壯観である。でもうまくばかりはいかない。枝の伸び具合、葉の繁り方の計算違いや、突然の風で木がくると回り隣の立ち木に引っかかってしまうことがある。引っかかった木の枝ぶり、かかった木の力、いろいろ計算して受けを切り始める。三本目にひっかかることもある。

隣のグループで、声を掛けてうまく倒したのに逃げ遅れて木の枝の下敷きになり、頭を怪我して大量に血を流し、収容所に運ばれた戦友がいた。ソ連にはろくな葉がない。軍医はバケツに谷川の水を汲んできて、それに食塩を入れてかき混ぜて

リングルのように注射したとか……。その戦友は間もなく元気になり仕事に復帰した。生命力の強さ、運の強さをつくづく知らされた事件であり、我々に生きる力を与えてくれた。

初めのうちは一本切ればよかったが、だんだんとノルマが増え四本、五本となり、ノルマが終わらなければ暗くなっても作業させられたことが度々だった。

ノルマがきつくなり、苦肉の策で、昨日切った木を今日の場所に積み換えてノルマを達成したように見せかけた。ロシア人も馬鹿ではない。怒ること怒ること、「ヨッポイボハマーチ」の連続である。一日の仕事の終わりに切り口に墨を塗るようになった。しかし、日本人の頭の方が上だった。切り口を三ミリほど切って積み直して、切り落としたのは燃やしてしまい知らん顔。

カマンジール（作業監督）がいて作業はうるさく指図した。囚人で刑期を明けても国へ帰らない人のように皆、根性は悪かった。自分でパッサー

ジ（監獄）、パッサージと指で格子を示して言うていた。

歩哨は、私達捕虜が怪我をしないように、病気をしないように守るのが仕事で、作業やノルマについては何も言わなかった。

運搬と川積み

切った木材も大分増えたので運搬グループができて、都合で運搬へ回った。運搬は五メートルほどのロープで木材の切り口の方を縛り、一人が材木を左右にぐらぐら揺らし、一人がロープを引くと雪の上を滑り出すので、次は二人で引く。つると面白いように滑る。休むとまたぐらぐらやって走り出す。道らしき所まで出して積み上げる。もちろん丸太のテコはあちこちで使う。

次は馬を使う別のグループにバトンタッチする。材木を二、三本纏めて縛り、馬に引かせて山奥より川の近くの崖の上まで運び、五十メートルも下の川辺に突き落とす。

下のグループが同じように川の氷の上まで引き

ずつて積み上げる。春先になって雪が解けて土が見えてくると滑らなくなり、道に雪を撒いて仕事をした。

雪解け

いつしか五月近くになると雪がどんどん解け出し、山野も川も水浸しで洪水である。谷川は音を立てて流れ、積んであった材木が崩れて流れて行く。大自然の姿である。谷川いっぱいには大量の材木が流れ出し、あつちに引っかかり、こつちに引っかかり、しまいには重なり合つて全部止まってしまう。川の岸辺を下つたり上つたりして、止まった材木を引きはがす仕事ができた。

命懸けの仕事である。重なっている材木の上をチョンチョンと飛び歩き、重要なひっかかりを確かめてトビ口で引きはがす。速やかに岸にたどり着く。あちこちで命懸けの仕事をするうちに上手になり、成功したときの気持ちは何とも言えない。大木が音を立てて流れる。切り倒した大木の音を聞くときのような充実感に浸った。

敵本上等兵と下痢

谷川の水も増え入浴もできないようになり、洗濯もした。依然として下痢は直らない。こんなのを慢性下痢と言うのだろうか。北朝鮮興南の日本窒素の宿舎で炊事班に抜擢された話は書いたが、他の兵隊は何もせずにごろごろしているとき、炊事の仕事はきつかったが食べ物はある余るほどであった。タラバガニのスープを作るときなど、鉈でカニの脚をぶつ切りにし大釜に入れて炊き上げ、中隊に分配する前に、太いうまそうな脚を掬い上げ、中身だけ口で吸い取つて食べ、カニは釜へ戻しておいた。まさか一碗に二本も入ることはないだろうが、当たつた兵隊さんはお気の毒だ。

缶詰が配給になればまず炊事班で食べ、数が足りなくなれば開けて混ぜ飯にして中隊に分配し、残りは炊事班用にとつて置いた。炊事班長つて、みんなこんなことをしていたのだろうか。

乗船してからは甲板に大釜を据えて、船の蒸気を使って釜の中にホースを入れてポコポコポコと

飯を炊いたりスープを作った。

シベリアに上陸する頃は罰が当たったのか下痢をしていた。チパリで作業中も下痢が止まらず、粗相してしまった。水がないので下着を洗濯できず、捨てる訳にもいかず、畳んで三カ月ほど枕にして寝ていた。

中支漢口の六中隊の内務班以来かわいがつてくれた大阪の畝本上等兵がチパリに来ていた。内務班では実力者で、新米少尉などは呼び付けて気合いを入れていた。私が下痢の話をする、「よし、俺が下の病院へ下ろしてやる」と、十人ほど病弱者が山を下りる組の中の一人を私とすりかえてくれた。その戦友には悪いことをしたが、そのままチパリにいたら私は死んでいたかもしれない。それ以来、畝本上等兵には会っていないが、五十余年たった今、ご丈夫だろうか。会ってお礼が言いたい。何度かテレビの尋ね人に申し込もうと思った。

チパリの炊事班長に青堀の平野勇治軍曹がいた

のを、帰って来て知った。チパリで知っていたら同郷の人と食事をいただき、下痢がもつと悪くなっていただろう。

雨上がりの晴れた日、歩哨が付き添って山越えして下る。太陽に照らされて土から霧が上っていた。川がぐるりと回っているらしく、山道の方が近いような気がした。山を下ると大きな收容所が見えてきた。

第五收容所の病室

第五收容所はソフガワニの中心地にあり、この辺の收容所の総括をしている所であり、大きな宿舎が五、六棟あり、千人は收容できるような大きな收容所である。元はロシア人の囚人の監獄であつたらしい。

その衛門隣の病室に入室、三十人ほど入れる病室で、やはり中央にストーブがあり暖かい部屋だった。軍医衛生兵もおり、薬はないが病室としての良い生活をさせてくれた。鳥目は相変わらずだったが、アメリカの肝油で鳥目に良く効くとい

う薬を、二日分六粒もらって服用した。二日目の夜中に小用で目が覚める。天井に電灯が二つ見えるのはいつものとおり。柱に伝わるうとするとなが見える。戦友の寝ている顔、真ん中にストープ、手製のサンダルが見える。嘘ではないかと目をこする。股をつねつても痛い。本当に治ったのだ。うれしかった。

働いている人で鳥目で悩んでいる人は沢山いたが、入室しなければ薬はくれなかった。私は病室から出るまでの間、まだ見えないと嘘を言つて薬を貰い、働いている群馬県の沼田という戦友に薬を横流ししていた。その後別れ別れになつてしまったが、今元気でいるだろうか。

病室で一日一人、二人死ぬのは当たり前まへのようだったが、ある朝起きたら八人死んでいた。飯野の須藤曹長もここで死んだ。鉄条網と銃剣の中、飢えと寒さと重労働と死との対面、よく生きてこれたものと、一期一会お会いしてお世話になつた皆様に感謝する。

一カ月ほど病室で暮らしたせい、下痢は止まらなかつたが元氣になり退室した。

「オンボ部屋」

退室したばかりの人はすぐ外の作業に出さなかつた。籍を置いたのが表題のオンボ部屋。黒田分隊長以下十五人、明けても暮れても毎日毎日墓穴掘り。だから皆が「オンボ部屋」と呼んでいた。

初めの頃は一人死ぬと、周りの戦友達が埋葬していたようだが、だんだん多く死ぬようになり、作業のノルマもきつくなり、戦友の死を弔う時間もなくなり、墓穴掘りの分隊ができたそう。

収容所の生活は一般の人と変わりないが、朝食を食べると収容所の裏の墓地に集合し、今まで埋葬された墓の隣に墓穴を掘るのが仕事で、一日じゅう墓地にいた。墓地は原生林を切り開いて造つたもので、碁盤の目のようにきれいに墓標が並び、その墓標には封筒ぐらゐの板を横に打ち付け、アラビア数字で捕虜番号が書いてあつた。

朝食が済むと戦友は各職場へ、私達は墓地に着くと穴掘りの予定地で焚き火を始める。夏のうちは土が凍っていないのですぐ作業を始めるのだが、冬は焚き火をして凍った地面を解冻する。原生林に倒れている枯れ木を引きずり出し、また生木を切つて燃やし、半日つきつきりで燃やしているが、何しろ零下三、四〇度、余り効果が見られず、二十センチも土がやわらかくなれば上出来である。

昼食後は火を片づけて、ツルハシやバール、スコップで入れ替わり立ち替わり掘り、また火を燃やし夕方まで二、三回繰り返し返して、寝棺が入る深さまで掘るのがやっとであった。こんな始末だったので、冬は戦友が死ななくとも墓穴を掘っておくという奇妙な話だが、前記のように一日八人も死んだことがあったので仕方なかったのだろう。六月頃になると死ぬ人が少なくなつたのでオンボ部屋は解散し、炊事の薪取りに出発するようになった。

第五收容所炊事の薪取り

第五收容所は一中隊二百五十人が入れる宿舍が五、六棟あり、その炊事場も広く、燃やす薪も莫大だった。オンボ部屋の解散者を主体に新班が編成された。十キロほど離れた山奥の山小屋に、糧秣とともにトラックで運ばれた。六月一日と記憶している。土橋の下に氷が残っていた。

二間と三間のカナダ方式。丸太を横に積んだ造り。入り口のドアと南側に小さな窓一つ。二段式の丸太のベッド、草を刈つて枯れ草にし、布袋に入れてマットを作る。歩哨と十五人、一つ部屋に寝る。

私が炊事係をやることになり、持参した鍋、釜を竈を造つてかける。水は下の川から汲んでくる。高台に上がると第五收容所が見える。一直線に続く收容所までの道。この辺は第一次欧州大戦のとき、日本軍がシベリア出兵し、あちこち密林を焼き払つた一部とか、高い木はなく、枝のなくなった枯れた立木の間に灌木や小さな白樺が生え

ていた。

ここでの仕事は黒焦げの立ち枯れ大木を切り、長さ二メートルに玉切りし積んでおく。トラックのボディが幅二メートルなので積みやすいため、収容所では切って割って使う。

別にノルマがあるわけではなく、収容所からトラックが来れば薪を積んで帰せばよい。だんだんと薪の山が増え、のんびり暮らした。日本に帰りたいという望みを別にすれば楽しいひとときだった。歩哨はリスなどを小銃で撃って遊んでいた。

茸もよく取って食べた。ネズミ茸などは三十センチもあつた。山本上等兵が、茸は裂けることと、虫がついていれば大丈夫と目新しい茸を探してきては試食してくれたが、最後まで腹痛も死にもしなかつた。

土手に穴があり、ムジナがいることを発見した。総がかりでムジナ狩りである。生木を燃やして煙を穴に入れる。ムジナいぶしと言うがやるのは初めて。煙に巻かれてふらふらと出てきたところ

ろを御用。晩は皆でムジナ汁で舌鼓をうった。

敗戦時、ソ連軍が樺太から大量のトロロ昆布を持ち帰ったが、開けて見ると中は草だ、これは馬の食べる物だと日本人に配給した。炊事でも使いきれないので各人に二キロも配給した。皆、袋に入れて枕にしていた。山で自由時間ができたので、飯盒いっぱいトロロ昆布を炊いて満腹を味わった。ところが舌はしびれ、手足はだるくなり、動く気がなくなりぐったりしてしまった。気は朦朧としてどうすることもできない。これは死ぬなと思った。心配しながら一晩寝たら朝はすつきりしていた。

だんだんと暖かくなり草木も芽を吹き、蛙も蛇も出てくる。見つければ皆捕まえてしまう。蛙は皮をむいて洗っておいても飛びはねる。あわてて捕まえた。生命力の偉大さ、力強さを私達がちようだいし体力をつけた。

シベリアには五葉松の大木があり、こぶし大の実が百から二百ぐらいついていて。数が少ないせ

いか、歩哨は切るなど注意する。休みの日、少し奥へ入って切り倒して実を取ってきた。それを焚き火の中に放り込む。じゅくじゅくと燃える松かさの先が白く灰になる頃引き出して実をつぶすと、大豆ぐらいの楕円形の白い実が沢山取れる。

ビタミンCが多いとか、これも命の源。

ビタミンCと言えば、赤松の葉にビタミンCがあるとか、それも南向きの葉が良いと取って飯盒で煎じて飲んだ。

低い灌木でユラス梅のような実のなる、マリナーという木が一面に群生しており、甘くておいしい。日曜日など、下の町からマダムが大勢取りに来た。飯盒に一杯取るとパンやタバコと交換した。山本上等兵はマリナーをつぶして水筒に入れて、南向きの木の穴に入れて置いて果実酒を造って飲んでいた。

山小屋の炊事班長の話をする。北朝鮮興南港を船出するとき、いろいろの食料を積んだが、大量の糶と染物の原料の粗悪な澱粉を積んだ。入ソす

るとすぐ澱粉が配給になった。コーンスターチと言っていた。炊事でコーンスターチを大釜で水に溶いて炊き上げると、一人飯盒一杯に分配できるが、食べるとすぐ小便に出てしまう。大部分が水分である。初めの一年、これで皆栄養失調になり死んでいった。

糶は作業から帰ってくると各中隊を通じて班に渡され、思い思いの方法で精米にし八時頃までに炊事に返し、十一時頃炊き上がり、重湯状が伸びて明朝になると糊状になり、朝食として採った。

山小屋へも糶が来た。初めは皆ですりつぶしていたが、隣にある大木を切り倒し、根本を鉋やバールで一日がかりで穴を掘り白を作り、細い二本の立木を利用して支点を作り、丸太の杵をその上に乗せてトクン、トクンと足で踏み糶を精米にした。これは私の仕事。

火は相変わらずマッチがなく、竈の中の火は四六時中管理した。夜、下の農園から娘が歩哨の所へ遊びに来る。夜中「ポール伊ト、ポール伊ト」

と私を起こす。歩哨が外で遊びながらタバコが吸いたくなって火をくれと言うのである。竈から燃え残りの木を鼻先へ突き出す。「スパシーボー」。下には女がいる。栄養不良の青年には何の感じも湧かなかつた。

あるとき将校の一団五十人ほどが下の道を通つたことがある。煙を見て上つてきた。かつての将校の面影はなく、腰にアメリカのバターの黄色い缶をぶら下げ、何々少尉、何々少尉と呼び合つていたようだが、私達の釜場の脇に捨ててあつた鮭の頭や骨を竈で焼いて食べていた。これが帝国陸軍の哀れな姿である。部隊住所を聞いたが言わなかつた。

仕事も順調に進み、あちこちに二メートルに玉切りした山が沢山できた。好事魔多しとか、誰かがタバコの火を消さずに捨てたのか、その火が時間をかけてくすぶり、積んだ木材に燃え移り気がついたときは一山が火の海。すでに火は次の山に移っている。火事場力というか夢中で材木をばら

す。班長も夢中になつて下まで駆け降りてバケツに水を汲んで来たが、一杯の水ではどうにもならない。三山ぐらい燃やしてしまつた。下の収容所から火の手が見えて分かつたものか、ソ連のキャピタン（大尉）が馬を飛ばして飛んで来た。

「ヨッポイボハマーチ」の連続である。一晚じゅう寝ずの番をした。横に倒れて完全腐敗寸前の大木が沢山あり、風が来ると残り火がホタル火のようにポーと明るくなる。それを消す。また他の方でポーと光る。寝ずの番をしながら、火事を起こしたので銃殺にされやしないかと一晚じゅう考えあぐんだが、何日たつてもおとがめはなかつた。

面白い話もある。日本人は勤勉で蓄えを増やす性質があるのか、少ない配給の食料を少しずつ貯めて、一、二日分は貯蔵してある。たまに雨降りが続くと下の収容所からトラックが来ないことがある。今日の食事だけで明日ないことがある。歩哨に「ザフトラ（明日）、クーシャイ（食料）、ニエツト（ない）、ニエラポータ（働かない）、ハラ

シヨ（良いか）」と尋ねたら、歩哨は「オデハイ、スパーチ（休みだ、寝ていろ）」。共産主義は働かざる者食うべからず、食べざる者働かなくて良いのである。

ところが、炊事係は三時頃起きて食事を作り、歩哨が起きて来ないうちに朝食を食べてしまい、知らぬ顔の半兵衛を決め込み、空腹の顔をして、一日大ぴらで休む。

下痢は慢性的になり一日十回も用を足したくなり、出るものもなく、飴色の粘膜が出るようになった。その後が気持ちが悪くずいぶん苦しんだ。炭を食べると良いという話もあり、炭もかじった。食事も少なくなったり、水分も飲むのを控えたり、お粥も作ったり、いろいろやってみたがだめだった。

積み上げた薪の山も沢山でき、枯れ立ち木も切り尽くしたので二カ月ほどで山を下りた。

草刈り

収容所は遊ばせてはくれない。今度は五十人ほ

ど編成し歩哨が二人付いて、薪切りの山小屋の下の道を通り、チパリ川のほとりの農場に派遣された。チパリ川は五十メートルほどの川幅に広がって、溪谷になっていて、川の向こう側に宿舎があった。チャチな吊り橋がかかっていた。この吊り橋が曲者で二、三人で渡るとぐらぐらと動き、途中で立ち往生してしまう。朝夕の行き来に苦労したと言うより怖かった。

いも掘り前に草刈りをした。何枚もある畑の奥の枝川のほとりをさかのぼる。川には鮭が手でつかまえられるほど、ばちやばちやと上っていた。歩哨が「ダワイダワイ」と急がせなければ捕まえるところだったが、惜しいことをした。

高台に広い草原があった。刃の長い、柄も長い大鎌で草を刈った。横一列に並んで注意しながら刈り進む。広い大草原も一日できれいに刈り終わった。四、五日たつて熊手とフォークを持って草原に上る。かさかさな枯れ草になっている。草を集めて積み上げ、高くなると登って下から手渡

ししてもらい、さらに高く積み上げる。大きな山が沢山できる。縄も掛けずに、風は出ないかなと心配する。

冬になり雪が降り川が凍り、その上に雪が降り積もると川は良い道となり、馬そりで簡単に降ろせる。

ジャガイモ掘り

前記の川向この宿舎から吊り橋を渡ってジャガイモ畑へ。畑は一辺が百メートルも二百メートルもある大きなもので、畑と畑の間には枯れた大木が転がっていた。

芋掘りは馬が鋤を引いて芋を掘り返して行く。その後から我々が柳の枝で編んだカルジンカという籠に入れて運ぶ。畑の端には選別機があり、芋の大小を選別する。

選別機は畳一枚ほどの広さの外枠を角材で作り、細い木を縦に並べて釘を打ち斜めに据え、高い所から落とす。選別した芋はトラックで倉庫に運びバラ積みする。大きな倉庫に山と積まれた芋

は、マダムが中央のストーブを四六時中燃やし、来年春まで温度を保つ。芋は零下になると腐ってしまうそうだ。

芋を拾い集めてだんだん重くなり、畑の中ほどから運ぶのが大変である。悪いことを考えた。カルジンカに入れて運ぶより、掘り出した芋を土の中に返す方が早い。歩哨やカマンジールの眼をかすめてすることはスリルがある。でも大部分はまじめに働き、疲れるとチャメをした。

朝、畑に行くと周りの枯れ木で焚き火をする。火のできた頃、カルジンカ一杯の芋を放り込む。焼ける頃合いを見計らって皆、要領良く取りに行く。熱い泥の付いた芋をポケットに入れる。芋を放り込む、また取りに行く。農場にいる間は皆、満腹感を味わっていた。私の慢性下痢は相変わらずだったが芋は良く食べた。カボチャ、西瓜スイカ、キユウリ、砂糖大根等もあった。あと二年半の抑留生活の体力を農場で付けたと言っても過言ではない。

変な話を思い出した。歩哨の一人が小用を足すとき、鉄砲を脇に置いてしゃがんでする。皆おかしいなと話していた。頑丈な体格で誰が見ても男に見えた。

途中からカマンジールの見張りに来る回数が多くなり、ダワイ、ダワイとせかすことが多くなつた。霜の降る日が近づいていたらしい。一晚の霜でじゃがいもの葉が真っ黒になつてしまつた。仕事はきつかつたが、楽しい日々が続いた。

こんな事件があつた。仕事の帰りには芋をポケットに入れて五個や十個持つて帰る。それが食べ切れず、宿舎には沢山の芋が残つていたらしい。ある日夕方帰つて来ると、宿舎には立ち入り禁止である。歩哨が無断で私物検査をしているらしい。ナチャニツクが芋を持ち帰る日本兵がいると訴えたらしい。芋を調べて持ち出している。庭には五俵も六俵も俵が積み上げられる。外からは続々と仲間が芋を持つて帰つて来る。庭のあちこちでは飯盒で芋を炊いて夕食を腹いっぱい食べて

まだ残りの芋を持つているのに、中ではまだ検査が続いている。

メークインのような芋があり、皮をむいて飯盒で搗いて餅にして食べた。芋掘りが終わつてまた第五收容所へ戻ることになつた。

第三收容所 エモ（町工場）

第三收容所に転属。最初にシベリア上陸して泊まつた公会堂の奥の方に第三收容所がある。三百人ほどいただろうか。第一五航空連隊第六中隊の仲間がいっぱいいた。

公会堂の少し先にエモという町工場があり、そこへ毎日十人ほどで歩哨が一人付いて通つた。鉄を切つたり、ヤスリを掛けたりする仕事だつた。下がすぐ海で磯に青海苔が付いていた。近くで漁師が網を引いていた。鯨や小魚がかかつていた。十センチほどの鮎のような小魚。秋田の船木さんが「別名キュウリと言つて、生のままかじるとキュウリの味がする」と。がぶりと食べてみる。本当にキュウリの味がした。

昼休みにフイゴの上に鉄板を乗せ、もらつてきた鯀を載せてジュウジュウと焼き、塩を振りかけて食べた。うまい。鯀がこんなにうまいとは知らなかった。鯀と言えば、内地では身欠き鯀か燻製の味しか知らず、鯀はまずいと思つていた。

こんなことがあつた。ある日工場長が、「ワニノ駅まで荷物を取りに行くのでトラックに日本人を三人乗せろ」と言つた。歩哨曰く「今日は私人なので工場と駅とは見ることができないのでだめだ。明日二人で来るから明日にしろ」と答えた。さあ大変、お互いに譲らず一時間も口論してゐた。私達は話し合いの成り行きを見守つて作業は中止し、遊んでゐた。結局明日歩哨が二人で来ることになり、駅行きは延期、共産主義の悪い一面を見た。

また、こんなこともあつた。昼間工場の上の方の民家が火災になつたことがあつた。家は残つていたのでぼやだつたのだろうが、住民がパッサージ行きだと話してゐた。恐ろしい国である。こそ

泥は平気でやつてゐるが、見つかつたらパッサージものだろう。

丸太掘りと黒シューバ（オーバー）

チパリ川の川口が貯木場になつており、私達が流した木材も入つており、他から船で積んできて落としたものもある。夏のうちは浮いてゐる丸太を引き寄せ、両端に綱をからめて五十メートルほど引き揚げコンベヤーに載せる。冬は凍りつゝいてゐる直径一メートル、長さ六メートルの丸太を、バールで掘り起こして引き揚げコンベヤーに載せる。冬になつて氷原の丸太掘り組に編入された。チパリの伐採は山の中で焚き火をしながらの仕事だったが、丸太掘りは氷原を寒風が吹きすさぶ、風よけは何もない、遙か彼方にワニノ市の町並みがかすむ。

最初の一本丸太の片側をバールで掘り下げる。広く深く掘らなければ丸太がバールでごろりと動かない。丸太掘りのカマンジールは黒シューバを着た大きな男で、囚人上がりで怖い人だった。暴

言の限りを尽くしたので皆震え上がった。白い雪原を高い町の方から下りて来るのですぐわかる。

見えると働き出し、騒いでいるうちは黙々と働き、帰るとサボり出す。半日も付いて指図することもあり、重労働をさせられた。こつちへ来ればあつちが休み、あつちへ行けばこつちが休み、生き伸びるためだ。

半日ばかりでやっと一本こじ上げる。綱をつけて引きずって坂下まで行き、両側に綱をかけた上で巻き上げる。上下太さの違う丸太は巻きながら調節して上げる。丸太は海に並んで浮いていたので、一本こじ上げると次はちよつとボールで突つけば良い。反対側にボールを二、三人で入れてテコ式に力を入れると簡単に動いた。たまたま丸太が千鳥になっていることもあり、こんなときは両側を掘り起こす。

仕事にも慣れサボり方も覚えたが、零下三〇度の寒風が吹きすさぶ一日は長い。サボって動かずにいると凍傷になってしまう。抑留中一番つらい

三カ月だった。

製材所と前田君

製材所は公会堂、パン工場の先の高台にあり、日立製の大きなモーターが何機も動いていた。日本語で「日立」と大きく入っているのに、ロシア人は「日本にはこんな大きなモーターはないだろう」と自慢したので、からかってやった。「日本にはこんな大きなモーターはないが日本には太陽が二つある、だからシベリアよりうんと暖かい」と言うと感じていた。

戦友が死ぬと製材所から板を持ち帰り、棺桶を作り埋葬した。だんだんと死ぬ人が多くなり、また作業がきつくなり、死人にかまっていられなくなり、毛布にくるんで埋葬した。ずっと後での話だが、他の収容所の話では、死ぬと裸にして倉庫の中に積み上げ、春になって埋葬したとか、痛恨の至り。合掌。

製材所には缶詰の箱の板切りに四、五日通った。長い板をセットし足で踏むと丸鋸が上がって

くる。足で踏む。ジュー、ポン、ジュー、ポン、これは大変な仕事だった。中腰での休みなしの仕事で大変だった。

ここには同じ班の前田君がいた。昭和十九年十月頃、南京の場外飛行場の教育隊に特別幹部候補生と言って、旧制中学の途中で志願して来た子供達が大勢いた。前田君はその中の一人で、たしか鳥取県の人だったと思う。教育が終わって兵長になっていたが、この子供達は部隊が北朝鮮に転出したため一緒にシベリアに送られる羽目になった。昭和二十年八月にはまだ十八歳にはなっていなかったろう。前田だの桐野だの本間だの皆、人なつっこい子供だった。本間は本間中将の息子とかで古兵にかわいがられていた。年が若く身体ができていなかったせいか、皆シベリアへ入り一年で死んでしまった。合掌。

入ソ時、食料にコーンスターチ（染め物に使う粗悪な澱粉）がよく配給になった。一人飯盒一杯配給になるが、食べるとすぐ小便になってしま

う。前田君はこれが嫌いで食べなかった。

前田君は製材工場に通い、材料があるのでスプーンやシャモジなどを作っていた。私に箸箱を作ってくれた。私はちょうどエモに通っていた頃だったので、ジュラルミンで箸を二組作り一組を彼にやった。今でも大事に持っている。製材所ではサンダルを作ったり、白樺の木でマージャンの牌を作り色鉛筆で色を塗り、取容所の中には二十組も三十組もできていた。鉄工場に行っている連中はバケツを作ったり釣り針を作ったり、いろいろの職人がいたので作る物もバラエティーに富んでいた。

過酷な労働とノルマに苦しめられながらも、無から有を生ずることをいろいろと勉強した。落とし紙がなくなり、物を書く紙もなくなり、困り果てた末、作業現場にあるセメント袋に目をつけて綴って手帳にしたり、適当に切って持参し、用を足すとき、しゃがんでから終わるまでの間に紙をもみほぐした。時間をかければかけるほどふわふわ

わといひ感じになる。その上丈夫なこと、この上なし。

第三收容所

ここでしばらく過ごしたので收容所生活を記す。

朝グループごとに数を数えて作業に出て行く。夕方皆、作業から戻り、食事を済ませて点呼となる。全員宿舎前に五列縦隊に整列、指揮官も列の中。五、十、十五、二十と二百余人を数え出す。炊事の人、便所の人、病室の人、皆動いてはいけない。十分もかけて終わるが合わない。第二回目も合わない。第三回目、また合わない。零下の寒空の下、三、四十分も立たされてはたまつたものではないが、捕らわれの身ではどうにもならない。

私達もだんだんと慣れてきた。シューバ、防寒帽で煙草を二、三本持つて出る。別々の職場へ行っているので情報の交換場所にもなった。暖かくなる頃には数の管理ができないうのを悟つたの

か、日本人に收容所内の管理、自治を任せるようになった。

脱走事件があつた。エモの工場と製材所との間にパン工場があつた。私も何回か行つたことがある。人気の職場だつた。冬は暖かくパンにありつける。ある二人が、パン工場で使役しながらパンを盗んでため込み、筏を組んで脱出を計画し実行したが、海を出たばかりで捕まつてしまつた。しかし何のおとがめもなかつた。だが、無茶な話である。間宮海峡を横切つても樺太へは上陸できず、北海道の宗谷まで行かなければならず、南風の吹く夏は浜に吹き戻されてしまう。

この首謀者が後で将校排斥の民主運動を起こし、一時リーダーになつたが、にせ民主運動の化けの皮がはがされ辞めさせられた。いつの時代にも小回りのきく人がいるものだ。

春先になると食べられる雑草が出てくるのを待つて皆、食べた。聞いた話だが、シベリアに世界三大毒草の一つがあり、誰かが食べて亡くなつ

たと聞いたが、毎日ばたばたと死んでいたののでそのときは何とも思わなかった。

出先の作業場で採ったり、収容所内の庭に出てくる雑草は総て採り尽くされた。鉄条網の外にはふさふさと良い雑草が生えている。ちよつと手を伸ばして採ろうとしたために望楼の銃が火を吹き、あたら若い命を散らした戦友がいた。逃亡じゃない、雑草採りだと抗議したが、捕虜の悲しさ。「逃亡しようとしたので射殺した、監督不行き届き」と叱られた。

私の慢性下痢は相変わらず治らない。医務室に行つて下痢と話せばすぐ入室させられて、何も薬がないので四、五日絶食させられる。皆栄養失調になっているので、絶食したため死んでしまうので医務室の門はたたかなかつた。

入ソ以来、食料も悪かつた。朝鮮から持ち込んだコーンスターチを食わせられた。量は多く、二人で飯盒に山盛りにあつたが大部分が水で、食べるとすぐ小便に出してしまう。生野菜は半年以上も

食はず、入ソ一年間に多くの人が死んだ。

第五収容所

入ソより一年ぐらいたつた頃より収容所内にも民主化運動が進み、中隊長たち将校はどこかへ移動させられ、選挙により委員が選ばれ、その互選により委員長が選ばれて、委員会が総て運営した。だが多分、ソ連の政治将校や共産党員の指導があつたのだろう。

第五収容所はもとソ連の囚人の監獄だつた由、一個中隊二百五十人が入れる棟が六棟建つており、中央土間の両脇に二段ベッドが並んでいて、角ストープが二つあつた。五百人分のスープが入る大釜が幾つもある炊事場と風呂場（シャワーと蛇口）と衛兵所。三メートルもある板塀と鉄条網と四隅に高い望楼が建つていた。

虱は熱気消毒によりいなくなつたが、夜、囚人が残していつた南京虫に悩まされた。南京虫の習性は暗くなると出てきて、刺すと言うより血を吸うのだろう、パツと電気をつけると一斉に柱や板

の割れ目に飛び込んでしまう。皆で何回やっても誰も一匹も捕まえられなかった。

兵隊にはいろいろの職や芸を持った人がいる。

日曜日は退屈なので落語に浪花節や劇をやるようになり、ソ連もチャンバラや戦争物でなければやって良いという許可を出した。

芸は身を助ける。専属の演劇部ができ、毎日演劇の練習である。唐人袋で着物を作ったり、馬の尻尾でカツラを作ったり、大道具小道具何でもお手のもの。「湯島の白梅」とか「瀧の白糸」などが上演され、日曜日には皆を楽しませてくれた。他の収容所へ出張出演もした。

隣の中隊には吉田正先生がいたが、当時は吉田伍長と呼ばれ、大先生とは知らなかった。二六三工場で船のカンカン虫をやりながらアンコウを釣っていた。作曲家の大先生で、自作の「帰還船」を教えてくれた。

帰還船

作詩・作曲 吉田 正

一、すさぶ嵐のシベリア賛歌

越えて今日来たこの港

むせぶ涙に臉を閉じりや

浮かぶ希望の帰還船帰還船

二、窓に小雪の冷たい朝も

七つ北斗の冴えた夜も

なでか気になるバンドの辺り

浮かぶ希望の帰還船帰還船

三、ああこの日まで忍んで堪えて

共に眺めるこの港

鳴れよ響けよ帰還のドラよ

明日の日本が吾等待つ吾等待つ

先生は、内地へ帰還してからもこの歌は発表しなかつた。

毎週一回、トラックで歩哨が一人付いて糧秣受領があつた。付いて行った歩哨は、秤（はかり）で目方を測つてトラックに積んだ品物を取ると怒つたが、倉庫の品物を取る分には何にも言わなかつた。倉庫の鮭を受領するときは小魚を放り込

み、米を受領するときは麦を放り込み、炊事に帰って来て大いばりで分捕り品を下ろすことができた。要領の良い歩哨は、倉庫の歩哨と話をしている間に缶詰を盗めと指示し、炊事に帰って来て山分けにした。糧秣受領には泥棒の名人が選ばれ、帰って来て班で分けた。

運悪く倉庫の歩哨に見つかつた兵隊がおり、衛門の重営倉に入れられた。中にはペーチカが焚いてあり温かだが、外の歩哨は寒さで震えていた。

隣には衛兵所があり鍵が掛けてあるので歩哨は要らないと思うが、ロシア人の考えはおかしい。立たされた戦友は気の毒だつた。

製材所で白樺の木でマージャン牌を作つて色を塗り、厚紙で花札を作つて休日に遊んだ。マージャンは二千点でパン一食分、花札は一回負けると桃印マッチの箱いっぱい砂糖と、ルールが決まっていた。

寝台の上下に寝ていた秋田県出身の舟木という戦友がいた。満州から逃げてきて南朝に向かう途

中、三十八度線の列車の中で毛布に包んだ軍隊の物を持つていたので朝鮮兵に降ろされシベリア行きとなつた。

舟木さんは賭けマージャンが大好きで、勝つときはパンを五個も六個も棚に積み、食べろ食べろと言うが、負けが重なると私のパンを三個でも四個でも持つて行つてしまふ。私は三日も四日も昼食抜きである。でも憎めない男だつた。

その舟木さんは痔が悪く脱肛だつた。仕事をサボりたくなると、力んで痔を出して女軍医の診察を受け、無能な軍医はすぐ「オデハイ(休め)」と言う、彼は働きたくなるまで遊んでいた。神経痛で真面目な人は気の毒だつた。幾ら痛いと言つても女ドクターは認めてくれなかつた。「ラボータ、ダワイダワイ」。嫌な言葉である。体温計をこすつて上げた熱でも「オデハイ」と言う。こんな無能な軍医が所々にいた。日本の衛生兵の方がよほど良かった。

二六三工場と女溶接工

第五收容所からサウガ湾の方を見下ろすと五百メートルほど先に港が見え、船を修理する二六三工場があり、毎日二百人ほどが働きに行っていた。私は機械仕上工として働き出した。朝早く衛門に人よりも先に最前列に並ぶ。なぜなら、行く先々の路上で煙草の吸い殻が拾える。いま一つは、二六三工場の衛門の扉が開いたら今日の目的地に早く駆けて行きたいからだ。船の碇泊中はゴミや残飯は海に捨てず陸地に捨てるので、広い工場の岸壁何カ所かに捨て場がある。鮭の切り身とか肉の固まりや大きな黒パンがごろりと落ちていくことがある。一度獲物にありつくると忘れられなくなり、朝一番に並ぶようになった。第一列の五人に並ぶのはなかなか大変。三、四列でも駆けて追い越す。工場の門を入ると蜘蛛の子を散らすように思い思い八方にちらばって行く。生きるためにはやむを得ない。世界最強を誇った帝国陸軍も形なしである。

国際捕虜規定なるものがあり、食事の量も決まっているらしく、一日主食、パン三百五十グラム、穀類四百五十グラム、肉五十グラム、魚百五十グラム、油十五グラム、野菜六百グラム、砂糖十八グラム、塩二十グラム、茶三グラム、煙草五グラム。全量受領すれば食べ切れないが、收容所のロシア人が横領するの、元々食料がないのか、女軍医が收容所を視察に来ると量が多くなり、帰るとまた少なくなった。

ロシア人の仕事は不器用で、日本人はどこでも「ハラシヨ」と褒められていた。お金も少し貰い、パンなど買った。冬は外へ出ず、一番良い職場だった。

針金で釣り針を作り、糸をつけて釣り道具を作り、飴玉ほどの黒パンをツバキを付けて指で練っている。餅のようになってくる。それを釣り針に付けて岸壁に下ろしておく。昼休みに見に行く。大きなアンコウがかかっている。アンコウは口が大きいので針を飲み込んでいる。餌を取られてい

る方が多いが、外仕事の人はちよくちよく見に行ける。吉田正先生はカンカン虫をやりながらブランコの上から釣りをしていた。一匹釣ると臍物を餌にした。五、六十センチもあるアンコウを一匹釣ると大変なご馳走である。野草を入れたアンコウ鍋は最高であった。

ドイツ戦線帰りの溶接工で私よりちよつと年上の美人マダムがいた。なぜか私を気に入っているらしく、朝工場に着くと「イト、イト」と迎えに来る。いま一人は誰でも良く、二人に酸素ボンベを担がせて船倉に降りると一人は帰してしまう。

広々とした船倉で二人でパイプの溶接作業である。彼女は光線除け眼鏡を掛けているが、私には何もない。たまには眼をやられて一晩じゅうほてって痛く眠れないこともあった。仕事の合間に、妻はいるか、親は、子供は、と四方山話。煙草やパンをくれて大事にしてくれた。仕事は一月ほども続いただろうか、三年間の抑留中の思い出の中で唯一、楽しい甘い思い出となった。

帰国命令？

入ソ半年ほどは食料事情が悪く大量の死亡者を出したが、その後は事故以外は死亡が少なくなった。ハバロフスク市の日本新聞社発行の「日本新聞」が毎月来るようになった。共産主義的な考えながら、日本の国情が遅ればせながら分かるようになった。学制六三制とか片山内閣とか東京裁判等々が知らされた。ソ連当局はいつも、日本に受け入れ態勢ができていないのでお前達を送り帰せないと言いつつ、二年近くなってしまうた。

昭和二十二年十月頃、ソフガワニやワニノの奥地や鉄道沿線に出かけていた人達が集められた。ソ連製の真新しい夏服が全員に支給され、船に乗せられた。いよいよ日本に帰れる。二年前に北上した間宮海峡を南下した。

船の中で聞いた話だが、ソフガワニで病気になる、朝鮮まで送り返されて病院で療養し元気になり、また送り返された所が見覚えのある所だと思つたらソフガワニだった由、また帰るのだが安

心できないと言っていた。

チパリの伐採、農園のジャガイモ、レバキ、みな思い思いにつらかったこと、亡き戦友を思い、また日本の家族を思い浮かべながら一昼夜、船は南へ南へと南下し続ける。

砂浜沖で船は停泊する。砂浜にテントが沢山見える。ナホトカ港とか。

平成十二(二〇〇〇)年八月、ナホトカ港を訪ねた。五十年前は何もない砂浜だったが、今はりっぱな埠頭ができ、外国航路の大型船が何隻も停泊しており、税関や大きなビルが沢山建っていた。

当時、皆うきうき日本帰還を待っていたが、漸く船は一週間で動き出した。ところが、夢に見た白米飯もぼたもちもお預けである。今年の内地帰還は港が凍るので来春まで延期。二年前に入港したウラジオストックに入港停泊した。万事窮す。上陸させられウラジオストックの隣の駅、第二の川駅の近くの収容所に入れられた。

ウラジオストック収容所と民主運動

二百人ほど入る一棟と守衛所とバーニヤ(風呂場)のある小さな収容所だった。平成十二年、シベリア墓参の折ウラジオストックを訪れたとき、第二の川駅と海辺にあった大きな油タンク貯蔵所はあったが、収容所跡地はあちこち捜したが見つからなかった。

ここでも作業はいろいろだったが、零下三〇度になると作業は休ませてくれたので温度を気にするようになった。零下二〇度を境にして寒暖の差があった。一八度だと暖かいと感じ二五度だと寒いなあと感じた。朝起きて床の中で暖かいなあと思うと、外の温度計は一七度を指していた。もちろん零下である。

除雪作業がよくあった。町中は両側に雪を積み上げ、自動車が一台しか通れない切り通しになっていた。五十人ほどでノルマを終え、前後に歩哨が付いて帰ってきたら、後ろから少佐が二人乗ったジープが追いついてきた。我々の、のろのろ歩

きに業を煮やしてか、「自分達の自動車が先へ出たいので、日本兵を雪の上へ上げろ」と声を上げた。我々は雪の上を見上げていた。後ろにいた上等兵の歩哨が少佐に銃を向け安全装置を外して「通るなら通ってみろ」と、力み返った。

少佐と上等兵、日本人には考えられないことが起きた（ソ連では、任務には忠実だが他の上級将校の命令には従わない、また民間人の任務は軍人でも侵すことはできない）。ついに車は交差点の広場までのろのろとついできた。

いま一つ、雪掻きの話

百人ほどで将校と歩哨二人が付いて列車に乗って隣の駅の町まで雪掻きに行った。皆、一生懸命働いたので昼で仕事が終わってしまった。

夕方にならなければ列車は来ない由。鉄道はウラジオ湾をぐるりと回っているの、海に向こうは第二の川駅である。海の上を直進すれば早く帰れるので、凍りついた海の上を歩いて帰ることになった。歩哨は海辺の上り口を知っていると思っ

たら何も知らず、大きな油貯蔵所の真ん中に上陸してしまった。道がないので鉄条網を切断して真ん中を突っ切って通れとの指示が出た。中ほどまで来た頃、銃声二、三発。民間人が怒って飛んで来た。しばらくすつたもんだの末、私達は通ってしまった。数日して、民間人の守る油貯蔵所を無断で通行した罪で引率した少尉は一兵卒に格下げされていた。

食堂のマナーも日本とは違う。日本では特別のとき以外は将校と兵隊とは一緒に食事をしない。将校には当番兵がいて食事から身の回りの世話までする。ソ連は兵隊も将校も並んでセルフサービス。食器が足りないときは将校でも洗うのを待っている。

ここでは民主運動が盛んで反ファシスト委員会というものがあり、五人ほどの委員が収容所の運営や全ての実権を握っていたようだ。収容所の出入り自由。ハバロフスク本部との連絡や、あちこちの収容所へオルグに出かけていた。夜になる

と、決して強制ではないが政治学級が開かれていた。天皇制とか軍閥とか帝国主義とか資本論等々いろいろ教えてくれた。聞いたことのないような単語も出てきた。日本へ帰るまでは共産主義者のふりをしなければならなかった。

ハバロフスクまで選ばれて政治学校に行った人もいた。一年間食事付きで作業にも出ずに学校暮らし。共産主義、社会主義、資本主義、すべて勉強して、日本に帰って自由主義者になればよいが皆、赤く染まっただろう。

私は初年兵、若い方だったので青年部長に選ばれ、先頭に立って何かやるふりをしていた。政治学級には率先して出席して、作業に出発のトラックの上では労働歌の音頭を取ったりした。

この頃、西の方から発疹チフスが発生したというニュースが広がって来た。全員が入浴前、全裸にして並べられ、女医が見ている前で体毛を剃られた。見られたものではないが、毛虱が発疹チフスの媒体らしい。幸いなことにここでは一人も発

病しなかった。

衛兵所前に掲示板があり、各作業所の成績がパーセントで毎日発表された。百パーセント以上の人はお金（ルーブル）が貰え、高台にあるバザール（公設市場）で日用品やパンなどを買っていた。特技を持つてお金の貰える職場がうらやましかった。

雪が解けてから十五人ほどで、海軍の施設のある高台で貯水池の穴掘りをさせられた。石山でツルハシもバールも弾んでしまう。なかなか能率が上がらない。夕方に出来高を報告しなければならぬ。一立方メートルも掘れていないが嘘の報告をする。一週間たてば大きな穴になっていなければならぬ。カマンジールが毎日「ボルシヨイプロホ ヨツポイボハマーチ（ちつとも働かない野郎）」を連発していた。掲示板には末尾の方に低いパーセントで出ていた。

そのうちに高台に建築が進んだビルの壁を塗ることになり、左官の募集があつた。穴場で毎日

「プロホ、プロホ」と言われているよりは左官の方がましだろうと、伊藤組として申し込んだ。皆、左官の手伝い程度はやっている人達だった。

砂をふるいで通してセメントと水で混ぜ合わせ、煉瓦やコンクリの壁に塗るのである。配合は六対一と測るので簡単だが、水は砂の湿り具合でむつかしい。水が少なければぼろぼろ落ちるし、多ければだらだらと落ちる。水の適量で苦労したが、第一日目からノルマ百パーセントを達成した。塗る人一人に手伝い四人かかっていたのが、上手になると二人で塗って下職三人で楽に間に合うようになった。穴掘りほど労力は使わずにノルマはどんどん上がり、収容所で一位を何日も取り続けてお金も貰うようになった。

昭和二十三年の春先、天気の良い日に皆既日食のあった頃、帰国のうわさが出始めた。「特技を持った者は帰さない」とか。左官になってとんだことになったと話し合っただけで悔やんでいた。

突然三十人ほどの人が移動した。もちろん帰国

したものと思っていたら、別の収容所へ送られた由。皆、衣部隊の兵隊とか、部隊長が敗戦後すぐ日本にトンズラしてしまったのか、八路軍との交戦状態を調査するためとかのうわさが流れてきた。うちの第十五航空通信連隊の部隊長も、敗戦後すぐ日本へ飛行機で帰ったといううわさはあった。兵隊はいい面の皮である。

ナホトカ港

一週間ほどして私達全員が移動になった。今度こそ帰国だろう、列車に乗ってナホトカ港へ。砂浜に昨年海から見たテントが幾つも並んでいる。千人一個大隊に編成されテントに入る。

反ファシスト委員会のアクチーブの人達が飛び回って、何もかもソ連の手先となり取り仕切っていた。二十日も一月もかかって奥地から列車でナホトカ港へ帰り着いて、日本海を眺めて「反動」と判定されてまた奥地へ送り返された人がいるとか……。それを日本人が指図している。

虎の威を借る狐とか、皆、戦々恐々としてい

た。寝ても起きても四六時中監視されているようで気が休まらなかった。砂浜に整列させられて何回も何回も検査があるが、いつ乗船するか、奥地へ返されるか分からない。嫌な日々が何日か続いた。

五月の中頃だった。日本から迎えに戦時標準船「山澄丸」が沖に姿を現した。今日は本当の整列である。一人ずつ名前を呼ばれて前へ進む。いつ後ろから「ちよつと」と呼び返されやしないかと心配だった。船のタラップを感無量に踏み締めてゆつくり上る。船が公海上に出るまで、いつ引き戻されやしないかとまだ心配だった。船内の食事はたぶんお祝い食だったと思うが思い出せない。食事の感激よりも、何百回も聞かされた「東京ダモイ」、嘘でだまされた「ダモイ」が実現した感激の方が強かった。船は穏やかな日本海を滑るように走る。暑い晴天の日だった。

四年前の昭和十九年八月十日、博多港を出港し玄界灘より釜山港へ渡るときは海は荒れ、初年兵

は皆、船酔いし食欲もなく、勤務にもつげなかった。私はカレーライスを二杯ペロリと食べて、船橋に立って潜水艦の見張りをしたことを思い出した。しかし、今日は鏡のような海である。

皆、思い思いの気持ちに乗せて船は静かに走り第一夜は暮れていく。何も覚えていないが、心のこもった日本食の夕食に舌鼓をうち、思い出と希望に燃えてなかなか眠れず朝方までまどろんでいた。一夜明ければ今日は日本へ。午後には内地が見えて来た。皆、上甲板へ総立ちである、だんだんと陸地が近づいて来る。私は左舷に立っていたので、左側に太陽に照らされた若葉の山が迫って来る。

シベリアで針葉樹ばかり見ていた目に、雑木の新緑は日本だなあと心から感ずる。木の栈橋が目に入ってくる。出迎えの大勢の白衣の看護婦さんが、日の丸を千切れるばかりに振っている。その他の人達も大勢、日の丸を振って迎えに来ていた。五十余年たった今でも、山の緑、栈橋、白衣

の看護婦さんの姿が目底に焼きついて消えない。ただただ涙がぼろぼろ出て止まらない。手放して皆、泣いて泣いて白衣も霞んだ。

平成十一年十一月五日、復員以来五十年ぶりに舞鶴を初めて訪れた。記念公園の上より港の復員桟橋を眺めたが、昔の面影は何もなかった。入港時、私は左舷にいたのだが、右の方にも山があり入江の良い港だった。

舞鶴

四年目に踏んだ日本の土、感無量である。上陸まず白い粉をかけられて消毒される。初めての経験である。アメリカさんの消毒用薬でDDTとか言っていた。次が予防注射、三種だか四種だか注射される。次の事情調査が長かった。抑留中の移動した経路、その土地土地での作業状況、食事の質量、収容所の組織、赤軍の様子、知り得る部隊名、死亡した戦友の名前、あらゆる面の調査が行なわれた。アメリカ軍のMPも一緒に仕事をしていた。多分、ソ連軍の軍事情報の収集だったのだ

ろう。

こんな笑い話もあった。トイレに入り、洗面所で掃除をしていたおばさんに、「おばさん、この水飲めますか」と何げなく聞いた。「なぜそんなことを聞くの、飲めるのは当たり前でしょう」と言って笑われた。思えば四年間、支那（中国）大陸からシベリアと水道の水でも下痢をするので、飲むことは絶対禁じられていたので無理もない。

いろいろの業務で一週間ほど留め置かれた。新しい海軍の冬服を支給され、引揚証明書、現金八百円、米、衣料品の配給券を支給されて帰途にいった。

引揚列車

各地方別に引揚臨時列車が仕立てられ舞鶴を後にした。私達の東海道と東北組の列車は品川行きだった。列車は京都駅に着いた。スマートなアメリカ兵と日本の若い女性が仲良く腕を組んで歩いていた。敵国人米兵と日本女性、怒りが込み上げ

てきた、戦前は日本人同士でも人前では腕を組んで歩くことなど考えられなかった。それが戦勝国の兵隊に尻尾を振っている。ツバを吐きかけたくなった。

愛国婦人会の人達が白いエプロンにタスキを掛けて湯茶の接待をしてくれていた。その間を縫って小さい小学生の女の子が手紙を渡してくれた。早速開封して読んでみると、やはり小学校五年生の女の子だった。「シベリアでおじさん、ご苦労様でした」そんな内容の文句のようだった。その子供とは七、八年文通していたが、いつとはなしに終わってしまった。

大学生らしき人達がどやどやと入って来て「列車内には泥棒がいますので、私達が貴方達の荷物を守りますので安心して休んで下さい」と叫んでいた。ありがたいことだ。駅に止まると泥棒が乗車して来るのだろう。今で言うボランティアのはしりだった。

舞鶴で支給された八百円は、途中で芋羊羹や煙

草等を買ったら東京駅まで来ないうちになくなってしまった。敗戦より三年たっているが、まだあちこちの町に爆撃の残骸が見受けられた。私達は勝つことばかりの教育をされ、敗れることは夢にも思っていないかった。国際捕虜条約とか赤十字条約など知らないために損をしたようだ。東京に近づくとつれて捕虜になったみじめさ、恥ずかしさが込み上げてきた。

舞鶴の引揚事務所から家に連絡してくれてあったらしく、父が品川駅まで迎えに来てくれた。他に親戚の人達も来てくれたかもしれないが、誰か思い出せない。

列車が品川駅に着き降りていると、父が列車に乗り込んできてバツタリ会った。お互いに驚いた。喜び合わなければいけないのだろうが、一瞬父の顔が曇って見えた。私の顔もそんなだったんだろう。

四年ぶりに会ったのに、最初に何を話したか覚えていない。また、品川駅から大貫駅まで二時間

以上一緒にいたのだが何も覚えていない。

合里集結、抑留

【執筆者の紹介】

生年月日

大正十二年四月二十四日

昭和五年四月

吉野尋常高等小学校入学

昭和十三年三月

右同高等科卒業

〃 四月

吉野青年学校入学

昭和十九年三月

右同研究科卒業

昭和十三年四月

黒田狭範製作所入所

昭和十九年八月

中部第三百三十部隊に入隊

〃 同月

中支軍第四航空通信連隊に転属、南京へ

昭和二十年一月

ビルマ第二十三航空通信連隊に転属（船便がない）

〃 二月

中支軍第十五通信連隊第六中队に転属、漢口合同通信所へ

〃 七月

朝鮮安州飛行場に転属

〃 八月

朝鮮新義州第六中队へ。敗戦、平壤（ピョンヤン）、三

昭和二十一年一月 シベリア、ソフガワニ上陸

昭和二十二年十月 ウラジオオストックへ移動

昭和二十三年六月 ナホトカより山澄丸にて舞鶴へ上陸、復員

昭和二十三年七月 黒田精工株式会社復帰

昭和五十四年三月 右同社退社

昭和五十七年七月 富津市交通安全協会入社

平成九年八月 右同協会退社

復員後、PTA会長、連合区長会長、農事組合

長、交通安全協会支部長等を務め、現在、全抑協

千葉県支部長、全抑協理事である。

（千葉県 林 興一）